

スカートめくりの報いは金的



玉子王子 著

一章 空手教室にて

市民会館。

室内運動場から体操服の少女が出てくる。十歳で小学四年生だが、もう少し小さく見える。
長尾綾。

自動販売機の前で財布を取り出す。ため息。ジュース一杯分しかない。

と、前にいた一年生ぐらいの幼女が、ジュースをもって走り出す。

急いでいたのか、綺麗に転ぶ。怪我をする転び方ではない。ただ、ジュースは吹っ飛んだ。

一瞬呆然とする幼女。ついで、泣き出す。

綾は頬を引きつらせる。とりあえず、起こしてやる。知り合いというほどではないが、知っている。

今公民館でやっている子供向けの空手教室に一緒に通っているものだ。別の小学校に通っている。

流れるに、ジュースを買ってやらざるを得ない。

そうなるだろうと思って、話しかける前に頬を引きつらせた。

が、無視していくわけにもいかなかった。

——泣いてる子を放っておけないもんね。

手ぶらで運動場に戻る。

ほとんど女子ばかり。初めは男女半々だったが、男子らは面倒くさがって来なくなり、女子ばかり残り、そうすると女ばかりだからと男子は来なくなり……というある種の悪循環。

綾の相手は、中学生の少女。

手加減してくれる。

軽い組手。

腹を狙う綾の蹴り。相手が進んできたので、もっと下に当たる。ボス、と股間。

無反応。

相手も無反応だし、綾も特に何も反応がない。

女の子同士である、股間に攻撃が当たるぐらい腹に当たったのと変わらない。

横で組手をしている六年の少年が一瞬青ざめる。

その対戦相手、中一の少女がにんまりする。

「ほら、集中して。あはは、男の子にとっては、他人事じゃないのかもだけど」

「う、うるせえババア」

「へー、そういうこというんだ？」

くい、と膝を開き、股間をがら空きにする。少女。運動服の前は、男なら幼児でもないぐらいまっ平。

「あ……」

——うわ、やっぱりなんもねえ。女だから……こうやってがら空きにもできる。こんなふうに見せられたら、玉があるこっちの弱さが引き立つ……ふざけやがって。

「うふふ、どうしたの？ がら空きだよ、狙ってきたら？」

「いや……」

「あはは、まあ、無理だよなー、男の子が女の子のここ蹴っちゃったら……仕返しで大変だもんね。ボールくんが。ついてる人は大変……あっ」

「ババア！」

わめき、突っ込む。

体格ではかなり劣る少年だが、動きはいい。

踏み込んで突き、突き、そして腹への蹴り上げ。

少女も対抗し、同じように蹴る。踏み込んで。

「あっ」

「はぐっ！」

同じように、腹を狙った蹴りが股間に当たる。相打ち。

相打ちのはずだが、少年はその場で膝を締め、内股になり、動きを止める。

「く、くうう」



「あは、どうしたの？ 相打ちじゃん」

動けない少年に近づき、腰に手をやって見下ろす少女。

ニヤニヤ。

元から体格で劣る少年が、内股で腰を引いていけばさらに頭の位置は下がる。が、仮に彼が二メートルぐらいの背丈があって、今だ頭が頭上だろうが少女は見上げつつ見下しただろう。

「あは、ババアとかいうからだよ？　そういう目に合うのは。女の子馬鹿にすると、いたいいたーい、金的でお仕置きだぞ」

この表現だとわざと「お仕置き」したような感じだが、もちろんただの事故だった。体格、筋力、技量、すべてで劣る年下男子にさらに急所攻撃までさすがに仕掛けない。もっとも、入ったら入ったで別に何とも思わない女の子様ではあるが。

顔を真っ赤にして見上げる少年。

「ひ、卑怯だぞ。玉は無しのはず」

「そんなおチン○ン保有者が一方的に得をする不公平なルールはありませーん。っていうか、玉は無しって、言われないでも私は……玉ないですけど？　ここ蹴ってわからなかった？」

再び股を開き、パンパンと叩いて見せる。

周りの女子たちも手を止め、ニヤニヤしながら見てくる。

「あー、かわいそう」

「金的いっぽーん」

「二個だけどいっぽーん」

「別のものはいっぽーん、男の子だけに」

「やだ、何のこと？」

「チ○ポ」

「女子にあるまじき火の玉ストレート」



九割女子の空間である。

小声で、一様遠慮しているというジェスチャーだけ示しつつも、しっかり聞いている男子らの反応を楽しんでいる。

男子らは不思議な恥ずかしさに顔を赤らめ、心なしか膝を締める。

「く、クソ……」

五年生男子。

睾丸が縮み上がるのを感じる。しかし、一物は立ちそうな不思議な感覚を味わっていた。

——ずるい、ずるいぞこいつら。女だから、キ○タマがないから、安心して狙ってくるとか、玉やられた奴を見下して笑うとか……クソ、あの痛み、あの痛みを知らないというか、一生知らないでいいという立場……想像できないし、自分の玉無くせるとしても絶対それは嫌だけど……あの痛みを感じるときにだけは、少しだけ女の方がって思う……

「ほら、組手」

前の少女。

一年生。

先ほど綾にジュースを買ってもらった幼女である。

子供は同じ年齢なら女子のほうが発育が早い、さすがに一年と五年なら、五年のほうがはるかに

体格がいい。

それでも……

金的が入れば、逆転できるかも・されるかも。そう、お互いうっすら思っただけ。

一年相手なので、手加減する男子。

一年の方は手加減しない。

ただ、顔と金的は遠慮する。

とはいえ、顔と違い、金的は「痛いから」という他人事からの、お義理の遠慮。

顔に当てたら自分も当てられるかも、というような切実なものではない。

そのため、当るときは当たる。

「はひ！」

回し蹴りにカウンター気味に放った蹴りが、パンと股間に直撃。

仰け反り、蹴りの途中なので当然片足立ちだったわけで、バランスを崩してその場に倒れる。

股間を押さえ、悶える。

「くむううう」

「あ、ごめんね」

言いつつ、笑いをこらえる少女。

——だめ、笑っちゃ。でも、笑えて来るよ。だってこんな大きいお兄さんが、あんなラッキーキックで転がって、お股押さえてゴロゴロだよ？ 金ちゃんってそんなに痛いんだ一。っていうか、そんな弱点、あんな蹴りやすい場所につけちゃだめでしょ。足でガイドされてて、そのラインに沿って攻撃したら当たっちゃうじゃん。狙ってくださいだよあんなの。

見下ろす少女。

見上げる男子。

少女の股間。体操服の前。当然のようにぺったんこ。

——く、クソが……これが男なら、今度蹴り返してやるけど、こいつにそれやっても無駄。むしろ、更なる金的報復を招くだけ……女に金的を蹴られたら、もうあきらめるしかない。仕返ししようがない、だってこっちには急所があるが、向こうにはないんだから。

「ちょっと、大丈夫？ どうしたの？」

三〇少しの女。空手教室の主催者だ。近くの空手道場の主でもある。ここで空手に興味を持ってくれた子が本格的に習いに来てくれたら、という思惑でこうして格安出張教室を開いている。

それと、もともと子供が好きという事。

倒れて悶える生徒を心配してしゃがむ。と、横の少女が済まなさそうに言う。

「あ、先生。その、私の蹴りが、ここに当たっちゃって」

「ああ、やだ。金的？ ボールくん？ ふふっ、それは痛いよねえ。男の子だもんね。先生女だけどうよくわかるのよ？ 昔っから……生意気な男子のキ〇タマ蹴りまくってきたんだから」

深刻そうな表情が一瞬で吹き飛ぶ。

そもそも、脳みそが吹っ飛ばうが一瞬で治せるナノメカ入りの薬が市販されている世界であるから、そんなに外傷に関する心配は必要ない。

俯せだったのを抱き起すというか、床に膝をついてそこに頭を乗せさせる。

「っていうか、痛そうね……」

「くむううう、だ、大丈夫です」

「そう？ でも念のため……」

柔らかい体操服のズボンを引っ張り、中に手を入れる。

パンツの中に滑らかな感触の柔らかい女の手が入ってきたのに、飛び上がるほど驚く少年。

「あ、ちょ」

もぞもぞと、パンツの中で蠢く指。

小指のような、皮で包まれた一物を摘まみ、指でくりくりと刺激する。

「これは……おチン○ンね？」

「あああ、は、はい」

「結構大きいけど、蹴られて腫れてるの？ それとも……元からご立派な大きさ？」

「あう、そ、そんな、普通、普通です」

「そうかな……おっきいけどなー？」

「うう」

くりくりされ、大きい大きいと煽られ、顔を赤らめるしかない少年。それほど強く当たったわけでもない金的の痛みも、相当楽になる。

その緩んだ顔を見つつ、手をさらに奥に伸ばす先生。

「うふふ、それで、こっちが……」

「あうっ」

「男子の急所だね。うふふ、握っちゃった。モミモミも一み、き・ん・の・た・ま」

「やめ」

膝を締めるが、関係ない。女の掌の中に急所を包み込まれ、揉まれる。

「あううう」

「コロコロ、うん、タマタマは無事ね。念のため、ナノ薬も飲んでおきましょうね」

飲めばどんな傷でも治る魔法のような都合のいい薬だ。

別に玉の状態を確かめる必要は一切ないし、一物をいじる理由は絶無といえる。

子供が好きなので、いじっただけ。

——うふふ、役得役得。ミニチン大好き。私の好きなポークビッツ。フランクフルトよりポークビッツ！ ん、おほ、立ってきた。ポークビッツ成長中！ 立っても可愛い！ こんなにおチン○ンかわいいのに、金の玉はしっかり急所なのね。かわいいわ……私も蹴りたいけど、今以上に男の子に逃げられちゃ文字通りたまらないから我慢しないと。あーあ、なんでみんな辞めちゃうのかなあ。おチン○ンしゃぶってあげればいてくれる？ そうだとすれば趣味と実益で最高……というか、実益は別にないから、趣味趣味アンド趣味って話だけど。あー、かわいいポコチンくん……

涎を舌で舐め取る。あまり少年の股間を揉み解しているわけにもいかず、立ち上がる。

「さ、そろそろ立てるよね？」

「は、はい、何とか」

「それじゃ、頑張っ。あ、今度は金ちゃんに当てないように気を付けてあげてね。キーンは無しっでことどね」

「はい」

「蹴っていいのは、悪い男の子のタマタマだけよ？」

「はい、わかってます」

せっかくの急所なのに、と多少不満そうな幼女。

歯を見せる先生。

「金の玉をやられたら、男の子はすぐ倒れちゃって練習にならないから。ここが頑丈な強者である女の子はね、優しくしてあげないとだめなの。玉あり弱者くんにはね」

「きゃは！ 優しくしますね！」

幼女だけではなく、男子と向き合っている数少ない女子たちも思わず笑顔に。男子たちは自分たちだけが急所を持っていることにフォーカスされ、一様「狙わないように」といわれているとはいえ不安になる。

ともあれ、狙って金的に入れられることもなく、組手が続いていく。

休憩時間。

端の方で座る綾。

周りには当然というか数人の女子。

「マジなんですよ、男子ってマジでクソ」

「綾の学校の男子ってそんななんだ」

「スカートめくりって……昭和か！」

平成も終わり頃に生まれた少女たち。

その中の一人、中学生が立ち上がる。

「そんなこと流行ってるんだ？ それじゃ……蹴っちゃいなよ。ここ」

パン、と股間を叩く少女。

「え、そこって」

「うふふ、そうよ。男の一番……弱いところ。っていうか、さっき散々話題になってたっしょ？」

「いや、まあ……でも女の子としては、キ○タマとかはっきりしたことはね、ぼかすのが利口な立ち位置というか、処世術というか」

「おもっくそ言ってるじゃん」

「ナノ薬で玉なんていくらでも治るんだから、そこそこの理由があるなら、潰す気で蹴っちゃえばいいのよ。男子なんて威張っててもねえ、一回きついキ○タマ蹴り食らわしたら大人しくなるのよ。……一ヵ月ぐらいはね。あいつら**本格派のアホ**だから一ヵ月ぐらいでまた忘れていろいろやりだすけど。でもまあ、みっちりやってやれば一ヵ月は平和だから。生意気な野郎はサブスク風味の定期金蹴りで躡けるべし」

「きゃ、先輩すごい！ そうですね、スカート捲ってくるようなクソ野郎はキ○タマ蹴り上げるべきですね」

——って、まあそんな簡単にはいかないけどね。でも玉蹴りって、女の子同士では話としては盛り上がるわ。やっぱ金蹴りはねえ、自分蹴られないしね！ キ○タマネタは遠慮なく弄れるからいいよね。へタなネタだとマウントだとかいろいろ言われて面倒だけど、キ○タマとなれば私ら全員マウント取る側だから。

笑いあう。

女子だけで話しているつもりだが、男子もいる、聞いてしまう者たちもいた。

こういうことがあるから、男子が減ってしまうのである。

二章 金責めお仕置きの始まり

双葉小学校。

綾は友人たちと途中で出会い、仲良く登校する。

下駄箱を通り抜け、廊下に差し掛かる。

「だから、そういう時はキ○タマ蹴れだって！」

「やだ、すごい先輩じゃん！」

「私ら女の子だから、蹴り返されないから安心して蹴っちゃえって」

「ついてないもんね、ゴールド！」

「そうそう、男子は付いてる。なんか肉の膨らみと棒が」

「膨らみが弱いんでしょ？」

「中に玉が入ってるんだ。お兄ちゃんの触らせてもらったんだけど。お風呂で洗ったときにね」

妹に玉を洗わせる兄というのはどうなのだろうか、などと考えない女子たち。

その後ろから、男子が数人近づく。

そして一人が、赤いランドセルを背負った綾のスカートに手を伸ばし、めくる。

「あっ」

「今日は白パンツ！」

「やめろって言ってんだろ男子！」

「うるせー！ スカートなんかはいてくるから悪いんだろ！」

「そうだそうだ！ おら、やっちまえ！ ほらっ！」

「きゃっ！」

「あ、やめっ！」

群がる男子たち。慌ててスカートを押さえる女子たちだが、そんな硬い物ではない、一か所押さえても横から回られれば捲られたりする。

それでも、やられるとわかっていればそうそう捲られないが、スカートを触られ、太ももぐらいまで露にされるのは女子たちにとっては大きなストレスだった。

綾のように怒鳴れるものはまだましで、気の弱い者は涙ぐむだけで何も言えない。

それでも、そうそう暴力をふるうのは難しい。

——ふざけやがって。でもやっぱり、いきなり蹴るとか無理。大体、玉って……私らにはないから、よくわからないし。

ないから遠慮しないという面もあるが、よくわからないから腰が引けるというのもある。

組手だとか、親しい相手でも蹴ってもいけるという舞台装置のようなものがあれば別だが、スカート捲りに対して機械的に金蹴りとはいかない。

と、気の弱い女子の後ろにクラスでも有数のうるさい男子が回り込む。

「ほらっ！」

捲ろうと手を伸ばす。

慌てて振り返り、スカートを押さえる女子。と、その動きの勢いでスカートが広がり、男子の手がその下を通り抜ける。

そして、勢い余ってパンツを掴んでしまう。

「あっ」

さすがに、それを下ろそうとはしない男子。

慌てて、青ざめて手を放す。

が、女子はそれ以上に真っ青になって泣き崩れる。

空気が一挙に冷める。

「田中あ、何してんのよ。パンツ触ってなかった？」

「いや、わざとじゃねーし。すぐ放したじゃん」

「放したら許されると思ってんの！？ ちょっと顔がいいからって……」

「うるせーな！ 女のくせにごちゃごちゃと、文句あるならやるか！？」

綾に詰め寄る田中、整った顔が歪む。

背は田中のほうが小さいが、気圧される綾。

男と女だ。

力では勝てないと刷り込まれていた。確かに、大人になれば全く歯が立たない筋力の差が出てくる。

男のほうが背が高い場合はもちろん、背が二〇センチ三〇センチ低かろうが、男のほうが力があるのが普通だ。

しかし、子供だとそうでもない。急速な発育が始まるのは女子のほうが早いのだ。

体格通りの力の差がある。

が、そういうことをよく知らない綾は気圧される。

それでも、踏みとどまる。

——なによこいつ。スカート捲って、パンツまで触って、しかも女のくせに？ そんな女相手に、暴力ちらつかせて黙らせようとするの？ 許せない……こんなやつ、男のくせに、女いじめて……でも、男相手に喧嘩なんて……ん、でも……

チラ、とみる。

短パンの前。

綾が大人になろうと、どういうふう成長しようと、絶対そうならないだけのふくらみを持った股間を。

——こいつは男。男は付いてる。男だけの……絶対急所が。

「田中やめろよ」

横の女子が声をあげる。

「うるせー！ 女は黙ってろ！ マ〇コカパックどもが！」

横を向いて叫ぶ。

その瞬間、綾は決断する。

パン、と軽く、爪先で持ち上げる。

田中の短パンの前を。

ふくらみをグニュッと女子の爪先が変形させる。足の甲に乗せて持ち上げた。
あまり強く蹴るのは怖かった。



——治るとはいえ、危ないかもしれないし、怒るかもしれない。でも、ちょっと軽く行き過ぎた、こんなじゃ……

軽く後ろに飛んで離れる。

恐る恐る反応を見る。

田中は目を見開き、棒立ち。

ゆっくりと股間を押さえに動き、涎を垂らしてうめく。

「あ、かつ、ふんぐうううう」

「あ、効いた？」

「ああああ！ た、田中っ！」

「長尾お前！」

「きゃっ！」

「ぎゃははは！ 玉！」

「蹴られてやんの！」

真っ青になる男子たち、喜色を浮かべる女子たち。

敵味方以前に、自分もやられるかもしれない者と、一生他人事として高見の見物ができることが確定している人間の差。

「か、ちょ……ほおおおおお」

股間を押さえ、汗を噴出させる田中。

睾丸から脳天に突き抜ける痛み。陰嚢を包む腹膜が収縮し、腹の中の内臓が締め付けられる。睾丸の激痛を押さえようと脳内麻薬が放出され、そのあまりの量に貧血が引き起こされて眩暈がしてくる。

そんなに脳内麻薬が出て、急所痛は身動き取れないほどの激痛だった。

「あ、か……」

腰を引き、グネグネと振る。意味がわからないが、そうすると少しでも痛みがましになる気がするのだ。

それを見て、女子たちが手を叩く。

「ちょっと、田中踊りだした！」

「お尻振ってる、お尻振ってる！」

「どういうこと？」

「くううう」

噴き出す女子たちに、顔を赤らめる田中。

「お、お前らふざけんな……笑ってんじゃねえ！」

「お、強気」

歯を見せる綾。顎を上げ、自分にはわからない痛みで悶える田中を見下す。

——うわ、やっぱり金蹴りは効くのねえ。あんなに、軽く持ち上げた感じだったのに、痛くてもう動けない？ あは、これいいわ。そんなに強く蹴らないでも大ダメージって、良心の呵責感じずに行けるじゃん。しかも、こっちは女の子様なので同害報復は無し。あは、女でよかった。

思いつつ、田中の顔を覗き込む。

「ねえ、どうしたの？ なんで動けないの？ 軽く蹴っただけだよ？ 女子なら全然平気だよ？ あは、男子だから、今のでもう駄目なんだ？ 男子って弱いんだなあ」

「こ、こいつ……」

「それで、ほかのみんなはどうする？」

「え、どうするって？」

「スカート捲りの罰に、大事なタマタマ蹴られるか、素直に謝るか、どっちにする？」

「ふ、ふざけんな、誰が謝るか……やっちまえお前ら！」

「お、おお」

「あれ？ やるんだ？ いいの石井？ 本当に？ キ○タマ蹴られたら痛い痛いだよ？」

「く」

「うふふ、女の子はねえ、キ○タマ蹴るのに遠慮しないよ？ スカート捲りするような男子は、キ○タマ潰したほうがいいからね、みんなで玉ばっかり狙って蹴るよ、玉ばっかり！ いいの？」

「そうだぞ！」

「謝らないとここ、大変なことになっちゃうよ？」

ここぞと、気の弱い直美も目を吊り上げ、涙を拭いて腰を突き出す。

打撃からは守る必要がない女の部分。

突き出されると、男子らは自分たちが同じようにできないことを感じ、つい腰を引いてしまう。

「ど、どうする？」

「さっさと謝らないと、全員キ○タマ潰しだから」

「痛いんでしょ？ 急所なんだよね？」

「私ら女の子にはよくわからないから、ムツチャクチャにするよ？ キ○タマ潰れるよ？」

「ふざけんな！ 玉なんて潰したらお前ら警察に捕まるぞ！」

「捕まらないよー、だって薬持ってるし。タマタマ潰れたらすぐ治してあげるから」

「それで、また潰してあげるね」

「ついでに、おチン○ンもハサミでちょん切っちゃおうか？」

「腕が切れてもすぐ再生するんだから、チン○ンならすぐだよ」

「ま、待て、謝るから！」

「ごめんよ！ スカート捲って！」

顔を見合わせる女子たち。

何をしようが、男子らが謝ることなどほとんどない。

教師に強要されないとまず謝ることはない。

いや、個人的に謝ることはあるが、男子グループとして動くときには女子ごときに頭を下げることはない。

それが、今、特有の急所を狙い打つと脅しただけであっさり謝ってきた。

「もういいだろ！」

叫んで、走り出す男子たち。

「ま、まって！」

田中が内股で、なんとかヨロヨロしながらも付いていく。

残された女子たち。

顔を見合わせる。

「今の……」

「私らの勝ちだよ！」

「金ちゃん狙って……男子に勝った」

女子たちも、それが急所なのは知っていた。

だがここまで有効だとは考えてもいなかった。自分たちにはないのでどのぐらいか全くわからなかったのだ。

この経験は、女子たちを変える。

トイレ帰りの綾たち五人の女子。

後ろから近づく男子たちこちらも五人。田中たちとは別のグループだ。

だが、田中たちから話を聞いていた。

——女のくせに、キ○タマ蹴って勝ったつもりかよ。思い知らせてやる。

小走りで近づき、綾の尻に手を伸ばす。

「ほら！」

「え、きゃっ！」

スカートを捲られ、顔を真っ赤にする綾。

次々、仲間たちもある者はパンツを見られ、あるものは何とかガードする。

目を吊り上げる綾。

「なにすんのよ！」

「へ、スカートなんて穿いてるから悪いんだろ！」

言いつつ、片手は股間をカバーする、彼女のパンツを見た男子。

男子を見て、頬を緩める綾。

「あれ？ こいつ見て、アソコ防御してる」

「うわ、ださ！ ボール防御！」

「いやいや、男なら当然なんじゃね？」

「女の子様相手じゃ、タマタマ守らないと怖くて立ってられないもんね」



「っていうか、こいつらみんな玉ガードしてる！」

「だせー奴ら！」

「な、なにい」

顔を真っ赤にする男子。

だが、急所攻撃への恐怖は股間防御を止めさせない。

と、その顔に飛びつく綾。

ガリっ、と爪でひっかく。

「ぐあっ！」

思わず顔を押しさえる男子。

当然、股間はがら空き。

「いたあああ！ あっ」

顔を押しさえた一瞬あと、股間がガラ空きなのに気づく。が、気づいたときには遅い。

満面の笑みで爪先を振り上げる綾。

「キーン！」

「あがっ！」

ぐによ、と綾の爪先の上で、ウズラの卵のような肉玉二つがひしゃげる。

足を下す綾。

棒立ちで、股間を押さえる余裕もない男子。

「あ、あ、あ」

「あははは、キ〇タマ痛い？ 女の子のスカート捲ったりしたら、キ〇タマの一つや二つ、蹴られても仕方ないのよ」

「お、お、女のくせに……こんな、あぐっ！」

ペン、と掌で股間を覆う綾。

ギュ、と肉を小ぶりな掌の中に集める。

爪先立ちになる男子を、あきれ顔で見下す。

「小さい女の子に、こんな簡単にやられちゃう側の性別がよくそうでない性別を見下せるねー。コレ、マジで潰してやろうか？ マジで潰してやろうか？ マジで潰してやろうか、キ〇タマっ！」

「あぐっ、やめ……」

コロコロと、女子の手の中で転がされる男の命二つ。

仲間の男子らが青ざめる。

「お、おい長尾やめろ！」

「そこだけはヤバいんだ！」

綾に駆け寄ろうとする男子たち。走るためには手を振ることになる。股間の防御が緩む。

叫ぶ綾。

「皆、やっちゃえ！」

「おお！」

朝の勝利体験は、気弱な直美でさえ「自分もタマタマ攻撃がしたい」と思わせていた。

前々から、スカート捲りをしてくる男子へのフラストレーションがたまっていたのだ。

というか、女子へのちょっかいはそれだけではない。

掃除をサボるとか、なんか偉そうだとか、からかってくるとか、細かいムカつきがたまっている。

それでも「顔面ボコボコにしてやろうぜ！」と綾が言ったならだれも動かない。

それに比べて、金的なら気軽だ。強くやる必要がないのも都合がいい。

女子たちにとって、金的はポコポコ良心の呵責を感じない程度の軽い攻撃をするだけで男子が勝手にのたうち回ってくれるという、極めて都合のいいものなのだった。

同じだけのダメージを相応の力で打撃を加えることによって生み出すのは精神的にきつくとも、痛みのよくわからない股間への軽い攻撃ならできる。

防御を解いた男子たちに、待ってましたとばかりに群がる女子たち。綾の方に走ろうとしていた男子らが不意を突かれる。

別に戦闘訓練もついでにない子供たちだ。

防御も攻撃も適当。

ただ、手のカップで股間を掬うような金的攻撃に技術はいらない。

次々と男子らが一番攻撃されたくない部分を、それを持たない女子たちに攻撃される。

「あがっ！」

「はぐっ、ちょ」

「こ、こいつら玉ばかり狙ってくる！」

「ひいい！」

ゾンビに群がられたかのように真っ青になる男子たち。

女子たちは満面の笑みだ。男子も怯えも、喜びを増していた。

「おらおらっ！」

「キ○タマ蹴って、キ○タマ蹴って！」

「よくも捲ってくれたね！」

「おチン○ンついてりゃえらいと思ってんでしょ！」

「キーン！ あは、くるしそー」

女子たちの執拗な急所攻撃で次々と沈んでいく男子たち。

「ひ、ひいい！」

何とか金的をかわしていた最後の一人が、綾たち六人に囲まれて追い込まれる。

もう半ば遊びで、ボスボスと膝蹴りする。あえて急所を狙わず、太ももなど周りを蹴っていく。

「ひ、ひ」

「あはは、ほらほら」

「当たるよ？ ほれほれ、大事なおキンキンに当たっちゃうよ？」

「やめて、玉だけは許してっ！ ご、ごめんなさい！ スカート捲って！」

「あはは、どうする？」

「皆やられてんのに、一人だけ謝って許すってのもね……そうだ、ちょっとこっち来いよ」

綾の指図通り、曲がり角の先、目立たない一角に連れ込まれる男子。

「あんた、さっきスカート捲って直美のパンツ見たよね」

「み、見てません……あっ！」

「おら、嘘つくとき○タマ蹴るよ？」

「見ました、すいません！」

「そうそう、それじゃ……お詫びにあんたのも見せろよ」

「え、パンツを？」

「きゃ」

綾の発言に、愕然とする男子、顔を赤らめる女子たち。

その反応を見つつ、さらに一步踏み込む綾。

「違う違う、男と女じゃ、パンツの価値は違うんだから、パンツ見せても償いにならねーの。ってわけで、あんたはパンツも脱ぐんだよ」

「えええ」

「やだ、綾」

「見たくないよ」

「私も見たくないよ。でもねえ、パンツ見て喜んでるクソチン○ンくんが、自分のチン○ンを見られて恥ずかしがるのは楽しくない？ いい仕返しだよ」

「あ、なるほど」

「や、やだ、許して！」

「じゃあキ○タマ蹴りまくるから。みんな、金蹴りフェス開催決定！」

「やったー！」

「蹴りまくるぞー、ユーガン！」

盛り上がる女子たちに、震え上がる男子。

「ひいい、わ、わかった、脱ぎます！」

「それじゃ、壁向いて逃げよ」

震えながら、ズボンとパンツを下す。つやつやした尻。

指さす女子たち。

「見て見て、お尻丸出し」

「きゃはは、タマタマ人質に取られたら言いなりなんだ」

「くううう」

「ほら、前向きな」

「ひ、ひいい」

真っ赤な顔で、股間を隠して女子たちの方を向く。

結構綺麗な顔をした男子だが、女子たちに下半身を丸出しにされている状況では綺麗もクソもない。

「ほら、手をどけて」

「う、う」

「手ごとタマタマ蹴り潰そうか？」

「わ、わかったよ！ ほら」

目を瞑り、手を挙げる。

顔を赤らめる女子たち。凝視する。自分たちにはない、男の出っ張りに。

「あは」

「きゃ、チン○ン」

「こんな小さいの？」

「お兄ちゃんのと全然違う。大人チン○ンと違って、皮で包まれてるね」

「ねえ、周りと比べてどうなの？」

「え、どうって……」

かなり小さいほうで、彼もわかっている。しかし自分から言う気にはなれなかった。

「腰振ってチン○ン揺らしてよ」

「ううう」

「いやなら……タ○キンキーック、だぞ？」



「ひいひいっ」

ジャンプする、竿はプルプルンというほどでもない、ちょこちょこと振動する程度。袋はそれなりに揺れる。恐怖で縮み上がっていきそうなものだが、追い込まれて逆に緩んでいる感じだ。

「きゃはは！ 大して揺れない！」

「タマタマ揺れてるよー」

手を叩く女子たち、スマホを出し、動画まで撮影する。

「ひい、やめて」

「いいの？ キ○タマ蹴るぞ？」

「ふ、ふざけんなよお前ら」

さすがに、股間を隠す男子。

「いい加減にしろよ、たかがスカート捲りで玉蹴るのフルチンで撮影するのって……女はすぐ被害者面するからな。所詮出来損ないの劣等人種……」

金銭的お願いしまーす！ といわんばかりの女性蔑視発言だが、散々な目にあわされていけばそういたくなる気持ちも理解できるだろう。

が、女子たちはもちろんそんな寛容さはかけらもなかった。

楽しげだったのが、一様に白けた顔を見せる。

「へー？」

「さっすがあ、おチン○ンランドの住民は言うことが違いますなー」

「それじゃ、女の子みんなでそのキ○タマ蹴りまくるから「おチン○ン公国に栄光あれー！」って叫びなよ」

「な、ぬ、脱いだのに……あ」

腕をつかむ女子。

左右に一人ずつ。

「お、お前らはな……はぐっ！」

「はい金パンチー」

「きゃはは、汚いよ直接は！　といつつ私もキーン！」

「あぐあああ！　ちょ、やめ」

「腰引けてる引けてる！」

「軽くポーンってしてるだけなのにねー、いったいんだー金ちゃんボールは痛いんだ。全然わかんねー、ぎゃははは！」

片手で手を掴み、空いた手でポンポンと陰囊を弾くように軽くパンチ。小ぶりの竿はないも同然。

目を剥き、股間を守ろうとするが掴まれて果たせない。腰を引き、膝を締めるのがせいぜい。

それだと、女子の小さい手から急所を守るには不足だった。蹴り上げなら何とか防げても、前からのパンチは難しい。

「あおっ！　ちょ、やめっ！」

「きゃははは！」

「そらそら、キ○タマパンチキ○タマパーンチ！」

軽いジャブなのに腰を振りまくり、オーバーリアクションして見せる男子の姿に唾を飛ばして笑い、さらにパンチの女子二人。

というか、別にオーバーでもなんでもなく、ダメージにふさわしい動きだが女の子様には大げさに見えて仕方ないのだった。

周りの女子たちも手を叩く。

「大げさ大げさ！」

「そんなに痛いわけねーじゃん」

何の根拠もなく、オーバーリアクションと決めつける女子たち。

やられている男子としては実のところ、もっと大げさに転がりまわりたいぐらいの痛みがあるが、手を持たれてリアクションを制限されているぐらいのつもりである。

「あぐあああああ！」

——痛いわけないって……玉無しのお前らに何がわかんだよ！？

お仕置きされそうなので、叫んでいなくとも口には出せなかつたろう考え。

はじめは左右の腕をつかんでいる二人だったが、前に綾たち三人も並び、五人がかりで一人の男子の睾丸を叩きまくる。

「あぐあああああ！」

「ぎゃはは、軽くしてるじゃん！」

「こんなんねー、痛いわけないって」

「まあ多少は痛いのかもね、きゅーしょらしいし」

しゃがんでニヤニヤと、赤く腫れる肉玉を見つつパシパシと軽いジャブを打つだけの綾。

見上げつつ、見下す。

「さあ、そろそろ懲りた？」

「こ、懲りた、だからやめて……ぐぐむうううう」

「ぎゃはは、それじゃ、男と女、どっちが強いと思う？」

「え？ そんなもん、男に……あああああ！」

「キーンキーンキーン」

「おーっと、パンチパンチパーンチ！ 男の急所に、綾選手の必殺パンチが炸裂さくれーつ！」

「これは痛い、これは痛い、これは痛い、男の大事な金ちゃん痛い！ 女のパンチでタマタマ痛い！」

パンパンと連続パンチの綾、周りで手を叩く女子たち。

と、チャイム。授業が始まる合図だ。

「お、もうこんな時間」

「それじゃ……許してあげるよ」

立ち上がって、微笑みつつ肩を叩く綾。ほっとする男子の顔は青ざめ、汗びっしょりだった。急所攻撃によるべとべとした汗である。

それでも、拷問の終わりに頬を緩める。

「ほ、本当に？ あぐっ！」

「はい膝キ〇タマ」

「ぎゃははは！ 油断させてタ〇キン蹴りとはね、綾えぐーい！」

「あ、あおおおお」

ようやく手を離してもらい、その場に崩れる男子。

しゃがんで、耳元に口を近づける綾。

「大丈夫？ キ〇タマ潰れた？ キ〇タマ潰れた？ 女子になっちゃった？ 女の子？ チン〇ンも切っちゃおうか？ あってもなくても同じの、小さいチン〇ン切っちゃおうか？」

「ぐううう」

もちろん潰れてなどいない。反応からして、大体わかっている女子たち。だからこそ安心して煽りまくる。

「やだあ、こいつキ〇タマ潰れてるって！」

「玉無しだ、玉無し」

「男子小学生がスカート捲りを責められ、複数の小学生女子にキ〇タマリンチを受けて睾丸を潰される事件発生」

「男子生徒は加害女子たちによってペ〇スも切断されており」

「性器を破壊される場面の動画をネット上で拡散されて、問題になっております」

半笑いで、男子の頭の周りではぼそぼそと話す女子たち。

彼女らにとっては、玉も竿も治ることだし、半ば笑い話である。

「女子に喧嘩で負けて、大事なものを潰される男の子の話」

「女の子と喧嘩したら、タマタマ狙い撃ちにされるに決まってるじゃん、ねー」

「女は陰囊蹴りまくると」

「え、いんのうってなに？」

「弱点ボール専用袋」

わらわら、というほどの人数でもないが、女子たちが男子の周りに集まる。

ニマニマ笑いつつ、自分たちにはない物の痛みで動けない者を見下ろす。汗を噴出させ、股間を押しさえて芋虫のように転がる男子。

「くうううう」

「あは、痛そう痛そう」

「うふふ「痛そう」を永久に超えることがない特権階級女の子様」

「タ〇キン治ったらちゃんと教室に戻るんだよ」

「パンツはいてね、ぎゃははは」

「これに懲りたら女の子様に逆らうんじゃねーぞ」

「というか、逆らうとかじゃなくて攻撃してきてるからね、こいつら」

「それじゃ行こう行こう。遅れちゃうよ」

チャイムが鳴ってから、遠慮のない膝金を入れたのであるから、すでに遅れているだろう。とはいえ、教師が来るまでに駆け込めばセーフではある。

他の男子らは、すでに逃げていた。

「あいつら薄情ねー」

「自分の玉が大事なんですよ」

笑ながら教室に向かう女子たち。

「効いたよね、効いてたよね」

「ここまで弱いなんて思わなかったよ、タマタマが。綾知ってた？」

「しらないよー、付いてないし。まあ、たまに組手でタマに当たった事もあったけどさ、正直相当演技入ってると思ってたよ、だって、蹴られたくないだろうしさ」

「でも、普通にガチだったと」

友人たちと、五人で廊下を歩く。

昼休み。

少し前まではスカート捲りの脅威を感じ、警戒して歩いていた。

だが、今日は気楽だった。

綾だけではなく、他の者たちもそんな感じである。

クラス的女子たちもだ。

皆、話を聞いていた。

綾たちが、生意気な男子たちにお仕置きをしたことを。

スカート捲りをすれば、急所攻撃。

睾丸を持たない女子たちには正直どのぐらいの重さなのか全くわからない罰だが、絶対急所らしいので抑止になると思っていた。

実際、今までは平気で教室でもやる連中がいたが、熱心にやってくる連中は朝とそのあとと二回の金潰しであらかたこりている状態だ。

今日金的を食らって負けたのに、今日のうちにリベンジしてくるほど男子たちはスカートめくりを命を懸けてはいない。

綾は平和な休み時間を嘯み締める。

——これで平和になるんだ。よかった。先生がやめろって言ってもやめないから、どうしようと思ったけど……なんだ、タマタマやれば止めるんじゃない。もっと早くキ〇タマ潰ししてやれば良かった。いや、だって私玉ないから、こんなに効くとは思わないし。

満面の笑み。

と、前に行く他所のクラスの女子。

クラスは三つずつある。

一クラス男女五十人位で、人数は半々であるからそれぞれ八十人程度いるわけだ。

スカート捲りは全校的に流行っているので、綾たちのクラスが金のお仕置きで男子らを委縮させても、全体としてはまだまだ何の関係もない状況。

今日起きたことは、まだ他のクラスまで伝わっていない。

前をいく女子たちに、彼女らのクラスの男子が近づいてく。

「ねえ、直美あれ」

「スカート捲る気だよ、酷いね」

「いやいや……ひどいのは私らでしょ？ うふふ……これからあいつらの、一番大事なところだけ狙って蹴りまくるんだから」

「きゃ、酷ーい」

仲間たちがにんまりする。

——被害が出る前に「やめろよ」というほうが正しいんだろうけど、それだと押し合いの形になるよね。やっぱりまずは男子にスカート捲りやらせて、怒った女子がキ〇タマ蹴りまくるという形が収まりがいい。文句言ってその場でやめさせたって、どうせすぐやるんだから意味ないしね。

考えつつ、綾は女子を追う男子の後をさらに追う。

女子の悲鳴が上がる。

「ぎゃはは！ パンツパンツ！」

わけのわからないことを言いつつ、スカート捲りを成功させた男子たちが飛び跳ねる。

涙目で抗議する女子たち。

しかし、もちろん男子らは取り合わない。

その、無防備に開かれた足の上にパンと軽い音を立てて綾の足の甲が当たる。後ろから器用に男の部分を押潰す。

「あ、え？ あぐうううう！」

一瞬何が起きたかわからない男子だが、それでも痛みでその場に崩れる。

青ざめ、振り返る仲間たち。

「お、お前ら何を！？ あ、隣の」

「スカート捲りなんかする男子はね、アソコ蹴ってやればいいのよ」

「もしタマタマ潰れてもナノメカですぐ治るから遠慮はいらないよ」

「むしろ潰しちゃえ！」

「な、なんだと」

「お前らふざけんなよ。女は玉ないからって……」

「ぶん殴るぞこら！」

「へー」

「怖い怖い。でも、みんなタマタマガードしちゃってるね」

「うっ」

股間を守りながら脅してもあまり効果はない。金的が効果的だと知ったばかりの女子相手ならなおさらだ。

指さして笑う女子たち。

「ビビってる！ 女の子にキ〇タマ蹴られるのが怖いんだ！」

「きゅっきゅーって、袋縮んでるんじゃない？」

「な」

股間を押さえながら、顔を赤らめる男子たち。

唇をかむ。

「ふ、ふざけんなよ女のくせに。誰が怖がるかよ」

「あ、「女のくせに」だって」

「スカートは捲る、女の子は見下す……マジでキ〇タマ潰すぞ？ お前らのその、お股についてるボール潰すぞ？」

睨み合う男女。

腰に手をやり、胸を張って足も堂々と開く綾。仲間たちも大体そんなものだ。

一方で、股間を押さえ、腰を引く男子たち。

女子たちは油断して先制攻撃を食らってもワンパンされることはないが、男子らはあっさりノックアウトされてしまう絶対急所がある。そこへの集中攻撃を示唆されている以上、守らざるを得ない。

それを嘲笑う女子たち。

「見て見て、マジでタマタマ守ってる。タ・マ・タ・マ、ターマタマ」

「ビビり過ぎでしょ。もっところ、堂々としなよ」

「それでもおチン〇ン付いてるの？」

「いやいや、あのダサい格好はチン〇ン付いてる人間特有でしょ。私ら付いてない側は、こうだもんね」

これ見よがしに足を開き、腰を突き出す綾。

自分たちには怖くてできない姿勢に目を剥く男子たち。

「あ」

「ほらほら、何なら攻撃してみる？ あ、スカート捲る？ いいよ、捲っても。まあその場合……ここにいる女の子みんなが、そいつの大事な、一番痛い痛一ところを狙い撃ちだけどね。男の二つのき・ん・の・た・ま」

「お、お前ら……」

「さあ、選んで。その子たちに謝るか、キ○タマ蹴られるか」

「だ、誰が謝るか……あっ！」

粹がった男子に群がる女子たち。

手、服、髪の毛をつかんで引っ張る。

「うわ、ちょ、あがっ！」

膝。

押し込むように股間に入れる。

「はいキーン」

年相応の睾丸が女子の小ぶりの膝によって腰骨に押し付けられ、コリッと左右に逃れる。

「あ……くううう」

唇を噛み、ほとんど白目を剥く男子。

押し込まただけなので、うまく骨の間に挟まっても潰れはしなかつただろう。

だが、一瞬でイキリ男子の心をへし折るだけのダメージは十分あった。

「も、もう……」

「そんな蹴りじゃさすがに効かないでしょ」

「あぐううう、も、もうやめ……あっ」

「それじゃもうちょっとキンキンキーン」

「あがああああ！」

腰を引き、必死で左右に振る。それでも、密着した女子の膝は的確に睾丸に吸い込まれる。多少は太ももにも当たるが、そちらはダメージらしいダメージもない。押し込むような膝蹴りなのだ。

それでダメージを受ける部分は、男の最大急所以外にない。

「やめ、やめえっ」

「そらそら」

「逃げてる逃げてる、必死で逃げてる！」

「いやいや、こんなの押ししてるだけでしょ。掴んでる髪の毛のほうが痛いはずだって」

「タマタマってホント弱いんだねー」

やられている男子を嘲笑い、同時に周囲で聞いている者たちを威嚇する。

スカートをめくられた女子たちはニヤニヤしつつ、青ざめた加害者らを見ていた。

「痛そうだねえ」

「あんたらも謝らないならこうだよー？」

「っていうか、やろうよ。私らもやりたいし！」

「キ○タマ蹴り、楽しそう！」

「ひ、ひい！」

「ふざけんな、殴るぞ、殴る……あっ」

「女の子殴るってさ」

イキリ男子の出現に、喜色を浮かべる女子たち。

一対多数は卑怯、などという感覚は股座に力の象徴をぶら下げた戦士の物。

か弱く可憐で、狡猾な女の子様にとっては男相手に複数でかかるのは当然のことだった。

周囲から群がって掴みかかり、隙を見て股間に膝。

「あが！」

「きゃ、反応凄い！」

「こんな蹴りでねえ」

「蹴ってないのにね、押してるだけ」

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい！ スカート捲って！」

「お、素直になった」

「初めからそうしろっての」

「くむううう」

手を放してもらおうと、股間を押さえて崩れる男子。

幼い野獣たちが次の獲物に目を向ける。

「よし、それじゃ次」

「お前だああ！」

群がる。恐怖で立ち尽くした男子は、あっという間に捕まる。

「ひ。ご、ごめ……あぐっ！」

「謝れオラああ」

次々、寄ってたかって捕らえては膝金。

すぐに謝っても聞こえない振り、何度か蹴ってからようやく放す女子たち。

あまりのことに逃げることもできず、廊下に倒れて股間を押さえてまるまる男子たち。

スカート捲りなどするのは、女子を見下し、イキっているタイプの男子ばかりだ。

そんなものたちが、たかが女子の攻撃に倒れ、身動き取れずはいつくばっている。

その状況に昂奮する女子たちを見て、満足げな綾。

「わかったでしょ？ キ○タマって、すっごく弱いって。キ○タマはザコ。それがついてる男子もザコ。ほら、この通りだもん」

むしろ倒れている男子らに聞かせるためのセリフ。ニヤニヤしながら見下ろす。綾だけではなく、たの女子たちも同じくだ。

「男子のアソコが、ここまで弱いなんて思わなかったよ」

「全然蹴ってないのに、倒れるって……」

「殴られて倒れるってどのぐらい殴られなきゃならないのかな？ それが、タマタマ狙うとショートカットか」

「えー？ なんでこんなに弱いのか？ そんなもんぶら下げてて大丈夫？ 普通進化の中でなくなりそうなもんだけど」

「ここで立ってる方が進化の成功例で、倒れてる方が失敗例ってことじゃね？」

「どんなに力が強くても、男はお股が弱すぎるー」

「こ、こんなん……卑怯なだけ」

「あ？」

倒れている男子の呻きに、喜色を浮かべる女子たち。

慌てて黙る男子。

だが、せっかくの金的チャンスを逃す女の子様ではない。

「聞いた聞いた？」

「女子は**策を選ばぬだけの事**、だってさー」

「実力じゃないって？」

「いやいや、「タマタマ遠慮してね」っていう、あんたらが勝手に決めた玉つきグループに都合がいいルール内での戦いこそ実力じゃねーでしょうが」

急所攻撃の効果を実感し始めた女が誰でも考えそうなことを考える女子たち。

辜丸を持たない女たちもそこが弱点なのは知っているが、持っていないだけにどのぐらいのなのかまるで実感ができない。

だからこそ、間接的にもそれを実感し始めたときの衝撃は大きい。

それは大きな興奮をもたらす。

「あくまでも男のほうが強いっていうんだ」

「いい度胸してるぜこいつ」

「こいつら、向こうの物陰に連れて行こう」

足を掴み、引きずりだす綾。

「な、なにする気だよ！」

いい展開になるわけがない事だけはわかっている。青ざめる男子。

股間を押さえて、動けない状態だが口は動く。

「あは、ちょっと静かにしてよ」

掴んだ足を開かせ、手ごとボスッと股間を踏みつける。

「あぐっ！」

手の下の辜丸に衝撃が伝わり、ビクンとのけぞる男子。

「ほら、ほかの連中も」

相手は五人、女子たちは十人ほどいる。

皆の通り道である廊下から、曲がり角を曲がって非常階段に向かう通路に引っ張り込むのはたやすい。

そこに引き込んでしまえば、周りからは死角である。

引き込まれる男子たち、逆らうと綾がやったように金踏み蹴りを食らうだけだ。

非常階段に出る戸を背に、並べられる五人。

「さ、本格的に謝ってもらおうか」

「わ、悪かったよ」

胡坐をかき、股間を押さえている五人。もはやイキる気力はない。

謝って許してもらおうとしていた。だが、それで済ますならわざわざ死角に連れ込まない。

連れ込むように指示した綾に女子たちの目が集まる。

腰に手をやり、男子らを見下ろす。

「本気なら、フルチンじゃない？」

「あ、やだあ」

「でも、パンツ見たんだし……それならチン○ンぐらい」

「女の子のパンツとチン○ンじゃ釣り合わないけど、仕方ないよね」

「し、仕方なくねー！」

「あ、勘違いしないでよ？ チン○ンじゃ釣り合わないってこと。女の子のパンツのほうが上だからね」

「な、何を……」

驚愕する男子たち。それに、女子たちは口々に言い募る。

「当たり前でしょ？」

「トイレのおしっこのところ、廊下から見えるんだよ？ 嫌でも見えちゃうんだよ？」

「っていうかよく見えるところでおしっこできるよねえ」

「水着の着替えの時でも、普通に丸出しじゃん」

「見せに来るクソもいるし」

「そういう奴に限って**よく見えない極小サイズ**だけどね」

「イキってる野郎って小さいよねえ大体」

「っていうか、今もじもじしてる連中の半分は見せに来るタイプのくせに何恥ずかしがってんの？」

「さ、脱いで脱いで。脱がなきゃ……キ○タマキックで全員女の子のするからね」

「ひ、ひいいい」

真っ青で顔を見合わす男子たち。

見下ろしながら、綾は唇を舐める。

——あは、ビビってるビビってる。男の子って、タマタマで脅せばなんでも言いなりなんじゃない？ よっぽど痛いよねー、あー、もっとやりたい。キンキンキーン、って。普通の攻撃なら仕返し怖いけど、タマタマ狙いなら私付いてないから一方的に狙えてお得だし。

震える男子たち。

「お、おい……」

——どうしよう、確かに見せることもあるけど。自分から見せるのと、無理やり脱がされるんじゃ全然違うのに……チ○コもない出来損ないの連中には、見られるものがある側の気持ちはわかんねーんだな。だからこそ、見せつけてやりたい気分の時もあるけど。でも、無理やりじゃ全然、嫌だ。

「お、お前ら……もういいだろ？ これ以上はやりすぎ……あ」

抗議した男子に女子たちが群がり、引き上げて立たせる。

そして当然のように膝金。

「あがっ！」

数人が並び、無言でゴスゴスと股座を磨り潰す。

手を離すと、その場に崩れ、まるまる男子。

「あぐああああああ、た、たま、たまあああああ」

泣く余裕もなく、涎を垂らして痙攣する。

震える余裕もなく、目で見ただけの男子たち。

見下ろす女子たち。

「こうなりたい？」

「嫌なら……脱げよコラ」

飛び上がるように立つ四人の男子たち。

もはや選択肢はない、次々ズボンとパンツを下ろす。

小指のような一物が四本並ぶ。

それぞれ、比較的大きい者もいるが、全体的に皮でしっかり守られた相応のモノ。

顔を赤らめて凝視する女子たち。

他人がいる場所で、意志に反して見せられている時とは明らかに反応が違う。

口を押え、仲間の反応を確かめながらまじまじと見る。

「あは、チン○ンだ」

「思ったより小さいんだね」

「この袋が弱いんだよね？」

男子らは完全に脱ぐのは嫌なので、足首まで下ろした状態。

それで、手はシャツを捲りあげている。完全に無防備だ。

その股間に近づき、指さす女子たち。綾たちは別のクラスだが、スカート捲りで狙われた女子たちは男子らと同じクラスである。

——全部見られてる、ほかの奴と比べられてる。俺の、一番小さいのに。一番小さいって笑われてる。

顔を真っ赤にするリーダー格の男子。

その前で、クラスメイトというか今隣の席に座っている女子がまじまじと見ている。

——わー、こんなに可愛いもんなんだ。お兄ちゃんのはもっとグロいんだよね。棒は発煙筒ぐらいで、先っぽも変なモノ付いてるし。

周りの男子と比べるようなことはなかった。わずかな差でも男は気にするが、女子の方から見れば誤差でしかない。というか、体積で十倍以上の兄の物と比べて劣っているとも、兄のが優れているともその女子は考えていなかった。

女子も大きさの差は差として認識するが、特に優劣など考えもしない。

むしろ、急所のほうに関心が移っていた。

——タマタマもずっしり、お兄ちゃんは袋から分離して形がはっきり見えるぐらいなのに、これは袋の中にまぎれこんでる感じで……本当にタマタマ入ってるの？

思わず、手を伸ばして袋を握る。

「あっ」

女子の指が太ももの間でもぞもぞし、陰囊を揉み解す。中の玉を遠慮なくまさぐられ、つま先立ちになる男子。

「あ、あううう」

「きゃ、大胆」

「汚くない？」

「タマタマしっかりあるよ。小さくてわかりにくかった」



「確かにわかりにくいね。あんたの、ちゃんとある？」

「はうっ」

「やめ」

一人が触ると、次々肉袋を握っていく女子たち。

「しっかり入ってるよ」

「私にも握らせて」

「これが急所かー」

「握り潰せそう……しちゃおうか？ なんてねー」

「指でピンと」

「あぐっ！」

「もー、大げさ！」

「ぎやははは、タマタマ弱すぎる！」

興味津々の女子たち。いいおもちゃだ。

竿の方も、皮をつまんで引っ張りだす。

「ぎゃはは、伸びる伸びる」

「中身こんななんだ」

「臭くない？」

「やめ……はふっ」

「ピンピンピーン。指で弾かれてその反応ってヤバくない？」

「これは膝で押しただけで「あぐっ」ってなっちゃうねえ」

大げさな金的顔を見せる綾に手を叩く周囲の女子たち。

倒されていた一人も引き起こされ、同じようにズボンを下される。

そして同じく、袋をもまれて皮を引っ張られる。

「それじゃ、そろそろ解放してやるか」

「あ、ありがとう」

「よしよし、いい態度。これに懲りたら、女の子様に逆らうんじゃねーぞ？」

そういう話だったか。

何か引っかかる男子たちだが、フルチンで女子たちに囲まれ、丸出しの部分何かあれば即座に集中攻撃の状況で下手なことは言えない。

「わ、わかったよ」

「そう、それじゃ最後に……みんな並んで」

クラスの女子たちを男子の前に並ばせる。

怯えておどおどする男子たちに、自信に満ちた女子たち。

スカート捲り前には、立場が逆とは言わないが男子優勢だったはずだ、だからこそスカート捲りというちょっかきも出してきた。

それが完全に逆転した。

今の女子たちには確信があった。

何か揉め事があれば目の前でプルプル揺れているモノを狙い撃ちにすれば自分たちが圧勝すると。

男子らにも、確信がある。

女子たちに男の証を狙い撃ちにされては勝ち目がないと。

「今日のことを忘れないように、一発ずつ金蹴りしてもらいなさい」

「え」

「そんな……」

金蹴りしちゃおう、と女子に言うのではない。

男子に、「してもらいなさい」という。

それは、男子に自ら金的の許可を出せという話である。

女子が一方的にするのとは違い、了承すら強要しているのだ。

「反省してるなら、お願いできるはずだよ。してないなら、みんなで玉蹴りまくるよ」

「ひ、ひいい」

「ほら、綾の言う通り。どうする？」

「反省してないの？ キ〇タマ蹴るよ？」

「で、でも……反省してるって言っても、蹴られるじゃん……」

「一回だけだよ」

「それも、反省する人には手加減するよ」

といういか、今までもそんな渾身の力で蹴ってもいない。

そんなに思いきり蹴れる間合いではなかったが、確かに全力で蹴っていなかったのは事実だ。

しかし加減しているわけでもない、その辺微妙。

女兒というのは「睾丸無し・分別無し」というある種最悪の組み合わせで、手加減なしの金的を放ってくる恐怖の属性だ。これが男児だと「睾丸有り・分別無し」で、少しはまし。

大人の女性だと「睾丸無し・分別有り」でこれまたわずかな加減は期待できる。

しかし女兒となると、加減を呼ぶ属性が何もない。

これは恐ろしい話だ。筋力的に大したことがないのがせめてもの話。

その辺、なんとなく察している男子たち。

——お前ら加減なんかできるのかよ。玉もない上にクソガキという最悪の取り合わせだぞ。とはいえ……

何発も蹴られるよりは、一発のほうがまし、ということも男子らはわかっている。

だが、ここで「金的してください」といえるほど、男にとって金的は軽くない。

一人が眉を吊り上げ、意を決する。

「い、いい加減にしろ！ もうやめろ、やめろっ！ あ」

振り回す手。それを、数人の女子が掴む。

「はい、反省なし。みんな、こいつらのキ〇タマ潰そ！ 全員ね、全員！」

「あ、やめ」

慌てて逃げようとする男子たちだが、足は自分たちのズボンとパンツでまともに動かせない。

その状態で、膝金を食らって一瞬で動けなくされる。

何度もボスボスと金蹴り、倒れたところを、ズボンもパンツも取られて足を開かされる。

そして、女の子様にとってはおふざけの技、男にとっては必敗の形勢である電気あんまの形になる。

丸出しの男性器に、女子たちの上履きが降ってくる。

グニュ、と踏みつけられ、グリグリと女子の足に磨り潰される男子たちの命。

睾丸が洗濯板のような上履きの滑り止めに押さえつけられて、腰骨にゴリゴリ擦り付けられる。

磨り潰し、足を離さずに膝の動きで振動を起こしてダメージを与えてくる。

睾丸を持たない女兒たちだが、それだけに遠慮無くそこを責めてくる。

「んがああああ！」

唾を飛ばす男子たち。

「ぎゃははは、苦しそう……そうだ」

しゃがんで男子の顔を見下ろしつつ、手を叩く綾。

踏み潰しは、クラスの女子に任せている。後々、彼女らのクラスでの立場が上がるだろうという配慮だ。彼女らだけではなく、他の女子も、男子に「いざとなれば玉狙われる」と怯えさせて立場が強くなるとの計算だ。

そのため、手が空いている。

「あんたたち、パンツ見たかったんだよね？」

「み、見たくないですうあああああ！」

「遠慮しないでいいよ。金ちゃん潰されてかわいそうだから……」

男子の顔にまたがり、スカートを持ち上げる。

かわいい猫ちゃんプリントの女儿パンツ。

男子が、なんとなく見たがっていたもの。

しかし、男子らが自分から見せるならいいというように、綾にとっても自分から見せるなら意味合いが違う。

「ほらほら」

「あは、それじゃ私たちも」

なんとなく、真似をする直美たち。

「ふぐうう」

「ほらほら、よく見て？ あんたらが仕返ししたいと思っても、何もできない無敵部分見て」

「ぎゃはは、そうだよ、私ら、タマタマないから電気あんまでも全然平気だもんね」

「よく見てよ。右玉ついてる？ ありませーん。左玉ついてる？ ないでーす。弱点ボールは一つもなし、これが無敵の女の股間。蹴ってみる？ 蹴ってもいいけど、反撃きつついよー？ だってあんたら、玉つきなんだから。股間攻撃は、女の子なら意味なしだけど、男の子だったら必殺になっちゃうからね」

「そうそう、私たち、付いてないから」

言いつつ、気弱な直美は股間の下の男子を見下ろす。

——うわ、痛そう、苦しそう。そして、悔しそう。そりゃそうよね、反対の立場になっても、私そんなに大したことないし。っていうか、やろうと思えば……タマタマにカプッと反撃可能だし。死んじゃうかもしれないけど、タマタマ噛まれたら。あは、蹴られただけでもこれだもんね。いつも威張ってる男の子が、女にはないタマタマを狙い撃ちにされて倒されてしまう……

気弱で、普段から綾たちより男子らにちょっかい出される率が高い直美は溜まっている不満も大きい。そして圧迫されてきた状況と現状の落差も大きく、喜びや興奮もひとしおだ。

——ああ、気持ちいい。パンツ見せるのがこんなに気持ちいいとか不思議。っていうか……パンツ越しじゃよくわからなくない？ 余計なもんがついてる、あんたらとの違い、はっきりと分らないよね？ それじゃ……

スカートで顔を覆いつつ、その下に手を入れる。

そして、くいと前をずらす。それだけで丸出しだ。男では考えられない気楽さで前を見せる。

スカートの下で、ちゃんと見えるかはわからない。

だが、出したということが重要だった。

——えへ、見えたかな？ 見えてるかな？ 女の子様は無敵だって、目に見えてわかつちやったかな？ これ見て、付いてる弱さを噛み締めて悔しがってね。

と、直美の動きに、綾たちも気づく。

「あ」

「え、なに？」

「いやいや……私もしちゃおう」

「それじゃ、私も」

次々、スカートの下でパンツをずらしていく女子たち。

さすがに気づく男子たち。男性器を踏み潰されつつ、女性器を見せつけられる状況にえも言われぬ屈辱を感じつつも、ただ玉潰しを食らい続けるしかない。

マン見せ金潰しすらかましつつ、男子へのお仕置きは続く。

体験版終わり

続きは製品版でぜひお楽しみください